

双葉病院「患者置き去り、医師逃亡」誤報道問題について

—10, 29医療制度研究会講演を聞いて— 会員 庄和中央病院 副院長 洞ノ口佳充

福島原発事故直後、3月17、8日 各新聞社は、福島・双葉病院について、“患者置き去り、医師逃亡”という記事を一斉に紙面に載せた。が、これは、全くの誤りであった。

双葉病院の医師や医療者たちは、病院から、わずか5キロにある福島第1原発が次々と爆発するという困難な状況の下で、患者・入居者の救助に懸命に駆け回っていたのである。

国は、原発事故情報を病院に知らせることすらしなかった。そして、救出の手立てもなかった。県や、大熊町当局は、多くの患者が病院、施設に残されている状況を、その救出を求める病院の度重なる要請にもかかわらず、放置し続けた。

そして、14日、3号機の爆発後には、防災センターにつめていた、国・県・大熊町、東電、自衛隊は、双葉病院の患者、職員たちを置き去りにして、センターを立ち去った。病院に残っていた、自衛隊隊長は、職員の車を乗り逃げし、帰っては来なかった。患者、職員を見捨てたのは、まぎれもなく、国・県・町・東電・自衛隊であったと言いうる。

にもかかわらず、各新聞社は、県防災センターが自衛隊情報を基にして発表した情報を、裏を取ることなく鵜呑みにし、発表した。大きくセンセーショナルに発表し、その後、自らの誤りを指摘され、誤りが明らかになった後にも、いつものごとくに、後日、ごくごく小さく訂正したのみだった。マスコミ各社は、責任を持って自らの誤報道を訂正し、逃亡したとされた医療者の名誉の回復を図るべきである。

I 事実経過、一医療制度研究会の発表、及び週刊誌などの記載からまとめる

A 震災直後の、双葉病院の現実、

双葉病院は、医局や事務室のある5階建ての管理棟を中心に、3階建ての西病棟と東病棟に分かれている。西棟は、療養棟、比較的軽症者が多い。1階は寝たきり高齢者、2、3階は車いすでの移動や立って歩ける患者がいた。350床で常勤医7名。通常よりも多い勤務医数で診療。病院は、ポリシーのある診療をしていたと推測できる。

11日、午後2時46分震災発生。その当日、職員全員は、暗闇の中、手探りでの必死ケアに携わった。

「困ったのは、水です。建物の屋上に貯水タンクがあるのですが、建物内の配管がやられてしまった。それで、天井から水がダーと降ってきた。カルテもびしょぬれになってしまい、非常用バッテリーが、漏電する危険もありました。特に2階と3階では、水漏れがひどく、踝辺りまで水が床を流れ、それが1階に落ちてきました」「冷水だけでなく、暖房用の温水も漏れてきました。それが水蒸気になって廊下や部屋に立ちこめて視野が悪くなりました」

「あちこちの部屋のベッドから急いでマットレスからはがして、寝床を作りました。西病棟の中で水の被害の少ない場所を探して、そこへマットレスを敷き詰めて寝てもらったのです。3月の日の入りは、5時くらいで、もう4時ころから暗くなり始めます。非常用の電源は、3時間しか持ちません。明かりがあつて活動できるタイムリミットは5時だと思つて必死でした」

やがて、非常用バッテリーの機能が失われると、病院内は闇に包まれた。テレビは映らない。政府・東電からの連絡は全くない。

職員は語る「水道が使えないので、患者の排せつはポータブルトイレを使いました。・・・いっぱいになると、それを前の小川まで捨てに行くのが大変でした」

最も深刻だったのは重症患者の入院する東病棟だった。日頃から、点滴で栄養を補給し、酸素吸入で命をつないでいる患者が多い。精神疾患のほかに、合併症を持つ患者も多かった。肺炎や気管支炎などの呼吸器疾患、膀胱炎、腸閉塞、腎炎や癌の人も。非常に危険な状態にある患者も多い。

「苦労したのは、あの暗さでした。電気のない闇の中で、患者さんの顔色がわからないことの怖さです。49人を手分けして診回りましたが、となりを振り返ったら呼吸が止まっているんじゃないか、という恐怖が付きまといました」60人の職員は、340人の患者に対し、必死にケアにあたった。

B 病院は、11日から12日にかけて、どういう形で患者を搬送すればいいか、町に、相談に行っている。ここから、搬送のための必死の試みが、医師、職員によって試みられた。

< 12日、 >

午前5時44分 政府が原発から半径10キロ圏内の避難指示を出す。午前6時、町の防災無線が原発の危機が迫っていることを知らせていた。

「災害対策本部長の町長さんに、『病院にバスを回してほしい。うちには、大型バスには載せられない車いすや寝たきりの患者もたくさんいる。よろしくお願ひします』と要請し、町長さんは、『わかりました』と答えてくれました。・・・ところが、役場からは、待てど暮らせど迎えが来ない。・・・8時過ぎから1時間おきに、何度も役場に足を運びました」

12時少し前、自衛隊、隊員が荷台に座って乗る幌付くトラックを使えると言ってきた。これでは、患者は運べない。やっと、午後2時、町が手配した5台の観光バスが、自力で歩ける209人の患者を乗せて出発。**これが、第1陣**となった。「バスは行く先がはっきりしなかった。まず向かった病院から車で30分くらいの、田村市の常葉中学。『もう一杯だから次に行ってくれ』それから別の小学校の体育館に行ってもだめ。田村市総合体育館でも受け入れてもらえず、最終的に落ち着いたのは三春町の要田中学校だった」「途中、トイレ休憩したが、バスの乗り降りだけで、30分かかる。中には我慢できず失禁した方もいた。交換する下着が無いのでバスタオルを巻きましたが、車中は異様な匂いが充満しまし

た。おむつの患者さんも、汚れているから替えてくれって言うけど、交換する場所もない。最終的に要田中学に到着したのは。もう午後7時近く、普通なら1時間もあれば着く距離ですけど、5時間くらいかかり真っ暗になっていた。」その後、いわき開成病院へ搬送される。

一次避難の後、病院には残った入院患者130人と、ドービイル双葉には、98人の入居者、計228人がいた。「寝たきりの患者は自衛隊などがすぐに救助し緊急病院などに搬送すると思っていた」しかし、救助隊は来ない。残った医師は鈴木院長とドービイルの施設長の2人、そして総務課長。3人は、交代で救出を求めて車で近隣を彷徨った。「患者がまだ院内に残っていることを行政は把握しているはずなのに、なぜ救助隊は来ないんだ」

午後3時36分、一号機、水素爆発、バスの窓を揺るがす爆発音。ある職員の言葉である。「ボン、ボンと今まで聞いたことのない音、空気が振動するような地響き。まるでこの世の終わり」

午後8時ころ、病院には、自衛官と警察官が訪れ、老健が13日の午前中、双葉病院が午後の搬送が決まった。が・・・

12日から13日にかけて患者の衰弱は明らかだった。しかし、職員たちは、翌日の救出を願って徹夜で患者の治療とおむつ交換にあたった。

<13日>午前の救出車両はこない。車で外に出て、防護服を着た消防署員に会って救出を依頼したが、音沙汰なし。午後に再び、表に出ると、パトカーを発見、救出を願い出る。「これ以上ほっておかれたら、130人の患者うち、100人近くが亡くなってしまう。時間がない。その無線を貸してほしい」と伝えた。

<ようやく救出が始まった14日。問題の日である>

(午前10時ころ 自衛隊が、双葉病院の患者34人と老健ドービイル双葉の入居者98人を救出。南相馬でスクリーニングをうけるために相双保健所へ向かった これが、第2陣となった。その後、午前11時1分、3号機が爆発)。

朝からの、救出の状況は、以下のものであった。

病室には医師たちが、病室から玄関までは、警察が患者をストレッチャーに乗せて運び、玄関では自衛隊が車までを運んでいた。この日送り出すことが出来たのは132人。職員たちが、必死に救出作業にあたっていた時、自衛隊の運転するバスは、職員に声をかけることもなく、行き先を知らせることもなく、出発してしまった。したがって、バスには、高齢者のケアができるスタッフが誰もいない状態で出発してしまったのだった。医師をはじめ職員たちは、置いていかれるなどとはつゆも思わなかったという。

バスは病院から30キロ離れた、相双保険事務所へ向かった。そこは、20キロ圏内から避難してきた人のスクリーニング会場だった。そこで、避難先に指定されたのは、いわき光洋高校だった。そこへは、福島市、郡山市を經由して、200キロ、6時間をかけての移動となった。中には、座席に座らされた、寝たきりの高齢者もいた。ケアをするスタ

ップはいなかった。容態の変化に気づく人もいなかった。

早朝6時半から順次出発した救出車両が、午後8時ころにやっと、いわき光洋高校に到着した。避難先に駆けつけたスタッフがバスに乗り込んで最初に見たもの。それは、座席に座らされたまま亡くなった顔見知りの高齢者だったと言う。

双葉病院では、避難を待つ間に4人、避難の途中で2人が無理な移動に伴う衰弱で、避難した先の体育館では、痰の吸引ができないための呼吸困難などで、44人が、合計で50人もの多くの高齢者が亡くなった。

14日朝の時点で、病院に取り残された227人は、第2陣で運ばれた132人と、最終的に病院に残された95人に引き裂かれる。

第2陣の出発の後、間もなく3号機の爆発(11時1分)。残っていた、自衛隊の隊長が、オフサイトセンターへ行ってくると言って、病院の車を乗り逃げした。職員たちは、ひたすら救助を待ち続けた。

14日、夜10時過ぎ、副署長が病院にやってくる。「院長。緊急避難だ、すぐ車に乗れ」東電が撤退を検討、切羽詰まった状況の中だった。副署長と院長は、割山峠、20キロの境界線あたりへ一時避難した。「自衛隊の救助隊が来るから割山峠で合流しろ」警察管はこう指示されていたという。2時間後に戻る。

<15日、>

午前1時ころ 鈴木院長ら警察官とともに、再度、川内村の県道に避難、自衛隊の到着を待ちうける

午前6時ころ 2, 4号機爆発

午前10時ころ 院長らと入れ違いに、自衛隊が双葉病院へ到着。最後まで院内に残った患者93人を救出。患者は二本松でスクリーニングを受け、福島市や会津若松などの病院、老人保健施設へ。**第3陣**

死亡者数50名。当日11日と翌12日に亡くなったのは0人。13日から14日の救出までに4人が亡くなる。死亡した50人のうち24人は、15日になってやっと遅れて搬送された人だった。

Ⅱ 災害対策本部17日発表。マスコミが一斉に誤報道、<福島・双葉病院患者だけ残される>読売、<病院放置か、避難で14人死亡>産経。県、訂正時にも、「病院の管理体制を調査する」と

17日、災害対策本部がマスコミに「県立いわき光洋高校(双葉病院)について」と題した発表を行った。(いわき光洋高校へ患者を搬送したのは、14日のことだ)「自衛隊の

救援が到着したとき、双葉病院には医師も職員もいなかった」「病院関係者がいなかったため、患者の状態は一切わからないままの救出となった」と。

それを受けて、全国紙は、「福島・双葉病院、患者だけ残される」読売、「病院放置か、避難で14人死亡」産経、などと一斉に掲載した。記事は、いずれも県災害対策本部の発表をうのみにしたものだ。

この県の発表の波紋は大きかった。「見殺し」「置き去り」「放置」「逃亡」など、医師倫理のかけらもない悪徳医者扱いの罵詈雑言が病院関係者に浴びせられたのだった。震災から8カ月たった今もなお汚名ははらされてはいない。

17日、県対策本部の発表の後、テレビユー福島をはじめとする報道機関の問い合わせでことを知った院長は、電話で県に抗議した。その日の夕に、県は訂正したが、それがまた大問題だった。県の担当者は、亡くなった患者は光洋高校に搬送した人だけではなかったと“訂正”したが、記者を前にして、「搬送時に関係者が病院にいなかったのは間違いはない」、と言っている。また、記者が「双葉病院の人は逃げたの?」と聞くと、「うーん、そうらしいんだよ」と担当者は、答えたのである。さらに、付け加えて、「病院の管理体制を調査する」などとも述べたのである。

しかし、先にIで見たように、双葉病院の医師や医療者たちは、病院から、わずか5キロにある福島第1原発が次々と爆発するという困難な状況の下で、患者・入居者の救助に懸命に駆け回っていたのである。

マスコミ・全国紙は、大きくセンセーショナルに発表し、その後、自らの誤りを指摘され、誤りが明らかになった後にも、いつものごとくに、後日、ごくごく小さく訂正したのみだった。マスコミ各社は、責任を持って自らの誤報道を訂正し、逃亡したとされた医療者の名誉の挽回を図るべきである。

では、なぜマスコミは、誤った報道を行ったのか、一つには、最近のマスコミの報道姿勢にあるように思われる。記者たちは、自分の足で、情報を拾い、考え報道するのではなく、記者クラブに詰めて、情報もらい記事を書くことが多くなってしまっている。当然ながら、記事内容は、現場から遊離した報道が横行することになってしまっている。

その報道姿勢に対しては、常に、「現場から離れたところで、無責任な報道をするな」という声が聞こえることになる。今回も、現地で原発事故によって翻弄される住民、そこで必死に医療を支える人々に身を置いて事実を追及する姿勢を記者たちが、持ち合わせていたら、このようなでたらめな記事を書くはずがなかったと思われる。

ジャーナリストの、上杉隆、浅野健一氏らによると、09年の政権交代後、政府関係の記者会見は一部オープン化が進んだと言われていた。インターネット新聞や外国メディアの記者なども出席できる場所が出てきていた。ところが、3・11の震災・原発事故をきっかけに、クラブ以外の記者が排除されるようになり、自公時代に完全に逆戻りしてしまったという。(そして、テレビなどで見る政府・東電の記者会見では、ほとんど、追及する質問はほとんど見受けない。福島原発の敷地内土壌からのプルトニウム検出のニュースを

最初に出したのは、記者クラブでなく、ユーチューブ・ニコニコ動画などのネット系メディアだった、という。)

二つ目には、マスコミ各社の、批判的精神の欠如である。医療制度研究会の講演会で、井上弁護士は、自らがこの報道に接した時のことを、こう述べている。「私は、この報道を知った時、この報道内容はおかしいと即座に思いました。なぜなら、この間の医療問題の政府・行政の姿勢、他方での医療者たちの姿勢を考えれば、報道のおかしさが見えたのです」と。誤った報道を流したマスコミ各社に決定的に欠落しているのは、この批判的精神なのではなかろうか。

英「インデペンデンス」特派員、デビッド・マックネイルは、雑誌に、「外国特派員から見た原発報道」という文章を寄せ、「日本のメディアは政府広報か」と批判している。

「原子力安全委員会が3月12日に一号機の金属容器のウラニウム燃料が溶け始めたようだと警告した際、東京大学の関村教授はテレビに懸念を打ち消すために出演した。彼は『ほんの少しの燃料が溶けて外に漏れたようだ』と言った。原発付近の住民は『落ち着く』べきで、『大半の燃料は容器の中にあるから、冷却されている』とも。・・・そして、彼の発言を流した放送局は、こうした明確に嘘だった評価と異なる見解があることを伝えなくて良かったのか」と。

また、氏は、上杉隆氏の見解を引用して、「原発事故の問題を報道する正しいやり方は、最悪事態を想定し、そのように書くということ。そして、その視点で、現状がどのようになっているかについて書き加えることだ。新聞やテレビはそのようには報じない。『心配ありません。安全です。逃げ出す必要はないですよ』というだけだ」と。

とすると、わたしには、マスコミの誤報道は、原発報道におけるその「政府広報化」と裏表ではないかという気がしてくるのである。

Ⅲ 双葉病院以外でも。患者施設入居者たちは、取り残されていた。

例えば、3月14日の時点では、浪江町特養「オンフル」では、入所者と職員280人が避難出来ずに取り残されていた。

原発から、4キロ、双葉病院にも近い双葉厚生病院ではどうだったか。

3月12日 午前6時43分 政府が発表した10キロ避難指示から1時間のことだった。患者194人を抱える病院には、それまで、避難指示は一切届けられていなかった。この日の早朝、ものものしい防護服の警官がやってきた。警察官は、「直ちに10キロ圏外に避難」とだけを繰り返したという。そして病院職員は、あわただしく患者搬送の準備をしていた。

午後3時 病院の玄関前で、ヘリによる救出を待っていた、重篤患者と職員。そこに、福島第1原発が爆発した。爆風を感じ、そして、空から綿のようなもの、原発の断熱材の破片が敷地に落ちてきた。その場にいた患者、職員たちは放射能にまともに曝されたのだっ

た。

そして、午後6時になっても、残された30人の患者と職員は待ち続けた。職員が、自衛隊に「ヘリが来ないんだけど」、と言うと、「いや今来ます」と言うばかりだった。結局救援は来なかった。翌13日午前にやっと患者、職員は退避した。

患者、職員たちが、放射能に曝されていた12日、13日。そこは、どれくらいの放射能だったのか。

原発事故の直後、身を挺して現地に入り、住民の安全のために各地の放射線を測定したが、豊田直己、広河隆一氏だった。氏が、3月13日午後の双葉厚生病院前で測定したところ、検出器は、100 μ Svの表示を振り切ってしまった。そして、1000 μ Svまで測定できるガイガーカウンターで測定しても、瞬時に1000 μ シーベルト表示を針が振り切ってしまったという。

氏は、「これまで取材した、劣化ウラン弾で破壊されたイラクの戦車からも検出しなかった値だった。あるいは、チェルノブイリ原発事故から25年たった今の人の住めないウクライナやベラルーシの取材でも、こんなことは経験しなかった」と語っている。

原発から10キロ圏内の防災対策、重点地域（EPZ）ではどうだったか。その地域にある5病院のうち3病院で、救出を待つ間、12~15日に10人が亡くなっていた。双葉病院で4人、今村病院で3人、西病院で3人である。一方双葉厚生病院は0人、県立大野病院は0人だった。双葉厚生病院、県立大野病院は12日から13日午前に避難が完了している。一方、死亡者が出た3病院は、13日の夜から、15日に避難、4日間も放置された。政府、県、自治体による避難の遅れが死亡者の多さにつながったのだった。

IV お粗末を極めた政府の避難指示、対処

双葉病院の患者、職員を見捨て、さらに地域の医療機関や、住民をイラクやチェルノブイリよりも高い放射線のもとに放置したのが政府だった。

政府の避難指示、対処のいい加減さは、言い尽くせない。

・3月11日 15:半頃 地震、津波発生。 原発事故を、双葉病院が知るのは、町内放送や、緊急車両でであって、政府・行政からの直接の連絡ではなかった、そしてそれは、11日の夜九時頃だった。

・21:23 福島第一原発より、3キロ以内の避難を政府が発表した。3~10キロは屋内避難とされた。「これは、念の為の避難指示でございます。放射能は炉の外には漏れておりません」

3月12日 午前2時。枝野官房長官は「発電所から3キロメートル以内の避難、10キロメートル以内での屋内退避の措置により、住民の皆様の安全は十分に確保されており、落ち着いて対処いただきたい」と語った。しかし、その4時間後には、避難指示は10キロ圏に拡大、さらにその12時間後には20キロ圏に拡大され、屋内待機も30キロ圏に

と、次々と拡大されていき、住民は振り回された。

5 : 44 避難区域半径10キロ。 18 : 25 避難区域20キロ。

・3月11日、夜の枝野官房長官の発表、「これは、念の為の避難指示でございます。放射能は炉の外には漏れておりません」

しかし、その時、福島第一原発、一号機中央制御室ホワイトボードには、“21 : 51分、原子炉建屋入域禁止、放射線量、10秒で0, 8m Sv”の記載がある。放射能漏れはないと、官房長官が語ったころ、12秒で一般人の年間許容量を超える放射能が、漏れていた。そして、すでにその時、一号機ではメルトダウンが始まっていたのだ。

・3月15日 11 : 00 政府は、20～30キロ圏内を屋内退避とした。その時、南相馬市長桜井氏は、「事実上の通行止め状態。食料など生活物資が入ってこない。」「国からの情報は全部テレビ頼み」と、政府の無策を批判した。

・3月25日 政府は、屋内避難区域を自主避難区域へと変更した。その時、南相馬市役所には、住民から「どこに避難すればいいのか」「避難の必要がないと言われたので安全と思っていたが違うのか」「避難したいがガソリンがない」は度の声が殺到した。

・4月22日 飯舘村など、当初から放射線量の高かった地域を、1か月も経った後に、計画的避難区域設定に設定した。

これにとどまらない。事故発生への対応策のお粗末さ

・有事の際には指令室となるべき本部（オフサイトセンター）も地震によって破壊され役に立たなかった。（わずかに柏崎原発事故の教訓として2010年7月に完成したばかりの免震重要棟が残っただけ）

・累積予算、約120億円もかけて運営されていた SPEEDI（緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム）のデータは、3月23日まで、公開されなかった。そのため、原発の爆発直後、最も放射線量の高い時期に、情報を知らされなかった住民たちは、被曝させられた。しかし、首相の原発視察前の12日未明には、SPEEDI の情報は官邸に届けられていたという。

・文科省が猛毒の放射性物質ストロンチウム90を福島県の土壌から検出したことを発表したのは、最終から1か月後だった。

・さらに政府の避難対策の杜撰さは続く。6月30日に指定された、伊達市などの特定避難勧奨地点、もしかり。避難の判断は住民任せ、避難に伴う移動手手段、避難先の確保、避難後の生活確保、なども全くないという内容だった。

・政府の無策の中、活動したのは、民間だった。小松秀樹氏の報告では、3月16日、厚労省、県に連絡しても全く指示が出ない中で、いわき市の透析患者7百数10名の搬送したのは、民間主導であった。

・病院以外の住民もまた、放置された。浪江町の町長は、言う。「1,998年の東電との協定では、連絡があるはずでしたが、全くありませんでした。わたしは、テレビで避難指示を

知りました」

家族3人転転と800キロ、避難し続けた人は、「国はとにかく逃げろと言うだけ。その後のフォローが無い」と怒りをぶつけた。

V 想定されなかった、大規模原発事故、その被ばく対策

国の原子力防災計画の問題

国の指導による、原子力防災計画は、10キロ圏外は作らなくて良いことになっていた。毎年行われている原子力災害訓練も、避難範囲は、10キロである。もっと広くという専門家の声に対して、変人扱い、税金の無駄使い、反原発論者と非難が浴びせられたという。

1999年（平成11年）JCO事故の後に政府が作った原災法。その目玉が、オフサイトセンター（全国22カ所308億円）であった。ここが、事故が生じた際に、司令塔となるはずだった。福島のセンターは、原発から5キロの近さに作られていた。そのため、事故後に避難区域となってしまった。放射線防護設備がないセンターは4日後に放棄された。

毎年の訓練も、JCO事故レベルへの対処にすぎなかった。2008年の大熊町の訓練は、想定避難範囲は、わずか半径2キロ。終息まで32時間という設定だったのだ。

国の指定した被曝医療、初期医療機関と2次医療機関

国は、被曝医療機関として、初期医療機関として、南相馬市立総合病院、双葉厚生病院、県立大野病院、今村病院、福島労災、を指定していたが、双葉厚生病院、県立大野病院、今村病院の3つは避難区域にあり、全く機能しなかった。

2次被曝医療機関となっていた、福島県立医大はどうだったか。そこには、被曝医療の専門家はおらず、広島大、長崎大から派遣した医師達が陣頭指揮をとっていた。14日、福島県庁では、数名の避難者から10万cpm検出されるという事件が起きた。そのとき、福島県立医大では対応不能となり、他大学からの応援の医師へ依頼せざるをえなかった。政府の被曝医療対策とはこのようなものでしかなかったのだ。

そして、指定された全国の被曝医療機関も、その4割が20キロ圏内に存在しているのである。東海村原発では、その30キロ圏内に、一次、二次医療機関がすべて含まれてしまうのだ。想定されていたのは、きわめて軽微な事故でしかなかったと言える。

しかし、少なくない専門家からは、大事故の可能性を指摘されていたことが明らかになっている。にもかかわらず、それを、意識的に、想定外の出来事だと、除外して、大事故への対策を取らなかったのが、政府・東電だった。

双葉病院、患者置き去り誤報道問題の深層には、ここにこそあると、私は考える。